

メルボルンに住む高齢女性の暮らしとライフ・ヒストリー

野邊 政雄

メルボルンに住む3人の高齢女性に、①日常生活、②何に幸福を感じるか、③これまでの人生の3点に関して聞き取り調査を2004年9月におこなった。本稿では聞き取り調査の結果を提示し、それに考察を加えた。考察によって、次の4点を明らかにした。①子ども（夫婦）と頻繁に交際できない高齢女性は、代わりに、友人と頻繁に交際をしていた。そこで、社会関係には代替性があるといえる。②3人の高齢女性は高い主観的幸福感を持っていた。これは、高齢女性が健康で、豊富な社会関係を保持していたからと考えられる。③大恐慌は、オーストラリア人の家族の生活に大なり小なり影響を及ぼしていた。④第二次世界大戦直後、オーストラリアでは専業主婦が一般的であった。

Keywords：高齢女性，メルボルン，パーソナル・ネットワーク，主観的幸福感，ライフ・ヒストリー

1 本稿の目的

筆者は日本学術振興会科学研究費補助金を得て、メルボルン¹⁾に住む高齢女性の暮らし、とくに、そうした女性を取り結ぶ社会関係に関する調査を2004年から始めた。2005年と2006年にその都市で調査票による標本調査を計画している。そのための確な質問を作成するためには、メルボルンの高齢者がどのような日常生活を現在おこなっており、これまでにどのような人生をお経てきたかを知ることがまず必要である。筆者はこれまでにメルボルンの家庭にホームステイをし、その夫婦が別居する両親とどのような交流をしているかの参与観察をおこなったことはある（野邊 1999a）。しかし、だいたいの質問をあらかじめ用意して、高齢者から聞き取りをするといった事例調査をオーストラリアで組織的におこなったことはなかった。そこで、2004年の8月から9月にわたってメルボルンに滞在したときに、標本調査をおこなうための予備調査の一環として、3人の高齢女性に日常生活やライフ・ヒストリーの聞き取り調査をおこなった。本稿では、その聞き取り調査の結果を提示し、それに考察を加えたい。

2 調査方法

筆者は調査対象者の話す英語のそれぞれの単語はほとんど聞き取ることはできた。しかし、オーストラリアで生まれ育ったわけではないから、調査対象者の話の文化的・社会的背景についての基本的知識を欠いていることがある。そのために、その人が一体全体何を言わんとしているか分からないことがときどきあった。例えば、筆者はある高齢女性に出身地を尋ねたとき、その女性は「パーク（Bourke）出身だ」と答えた後で、若い頃の苦勞話を始めた。筆者はその女性がなぜ苦勞話をし始めたか理解できなかったのて、オーストラリア人の友人に尋ねたところ、その女性は単に自分の出身地を言っただけでなく、ニュー・サウス・ウェールズ州の西部に広がる砂漠地帯に接した辺境の地の出身であるということを書いてたとのことであつた。筆者はパークが辺境の地で、そこでの生活がたいへんであるということを知らなかったのて、調査対象者の話の展開を理解できなかったのだ。また、調査対象者が話す俗語的表現を理解できないこともあった。例えば、別の高齢女性は、退役軍人会（Returned Services League of Australia, RSLと略することが多い）の経営しているバーで「boysをからかう」と言ってい

た。筆者は当初boysというのはそのバーで働く若いバーテンダーのことだと考えていたが、オーストラリア人の友人に尋ねたら、それはそのバーにいる同年輩の男性であるとのことであった。

知らない基本的事柄や理解できない俗語的表現に出くわしたときに、筆者がそれらを調査対象者に尋ねながら調査をしてゆくと、会話がうまく弾まなかった。そこで、筆者があらかじめだいたいの質問項目を作成し、雇用した調査員に質問をしてもらった。調査であらかじめ決めておいた質問項目は、①日常生活、②何に幸福を感じるか、③これまでの人生の3点である。調査員にこの3点を調査対象者に質問するように指示をした。そして、筆者は聞き取り調査に立ち会った。調査員が聞き出した内容が不十分であるときや、話された事柄について更に詳細に調査対象者から聞き出したいときには、筆者が臨機応変に質問をすることもあった。会話をテープレコーダーに録音し、テープ起こしをあとでおこなった。会話を理解できないときは、筆者はその部分のテープを調査員に聞いてもらい、調査対象者の話の背後にある文化的・社会的背景を解説してもらったり、俗語的表現の意味を説明してもらったりした。だから、本稿での調査対象者の話の紹介には調査員の解釈が含まれているかもしれない。

筆者の友人が、メルボルン東部の郊外に住む3人の高齢女性を紹介してくれた。その友人は敬虔なカトリック教徒であったので、その高齢女性もカトリック教会と何らかの関係を持っていた。だから、3人の高齢女性の暮らしやライフ・ヒストリーをメルボルンの高齢女性に一般化することはできない。しかし、メルボルンの高齢女性の暮らしを知る手がかりにはなるだろう。面接調査は2004年9月中旬におこなった。

3 結果提示の方法

この調査の目的の1つは、筆者が作成した調査票をプリ・テストすることであった。そこで、調査票を用いた面接調査で、活動能力、高齢女性のパーソナル・ネットワーク、主観的幸福感を測定した。これらの結果についても、提示しておく。まず、活動能力は、ロートンの活動能力指標を用いる(Lawton 1972)。これは、「あなたは小切手を書いたり、支払いをしたり、金銭出納記録をつけることができますか。」といった10の質問に「問題なくできる」、「自分でできるがむずかしい」、「助けが必要」、「自分でできない」の4つの回答からいずれかを選んで答えるものである。次は、パーソナル・ネットワークの測定方法である。筆者(野邊 2000)は、

かつてメルボルンで20歳以上55歳以下の女性を対象に調査をおこなったことがある。このときに、パーソナル・ネットワークを測定するために開発した質問を用いて、高齢女性のパーソナル・ネットワークを測定した。それから、主観的幸福感は、ロートンのPGCモラル・スケールを用いた(Lawton 1975)。これは、「あなたは自分の人生が年をとるにしたがってだんだん役だたなくなってくると感じますか。」といった17の質問に「はい」か「いいえ」で答えるものである。そして、高いモラルと関連する選択肢を選んだ場合に1を与え、そうでない場合は0を与える。この得点を17の質問について合計してゆくので、値は0から17まで分布する。

高齢女性の話をできるだけ臨場感をもって再現するために、高齢女性の話は一人称の形で紹介する。質問項目の順番に高齢女性の話を紹介してゆく。話はそのまま日本語に翻訳して紹介をしているわけではなく、若干の編集をおこなっている。というのは、調査対象者は、必ずしも、話をまとめて、論理的に話してくれたわけではないからである。例えば、調査員が日常生活について尋ね終わって、別の事柄を尋ねているときに、調査対象者が思い出したように日常生活について再び話し始めるといったことがあった。もし調査対象者の話をそのまま日本語に翻訳すると、日常生活についての話がさまざまなところに分散して、理解しづらくなってしまふ。だから、日常生活についての話は最初にまとめることにした。このように話を整理するといった編集はおこなっている。本文の括弧内に書いてあるのは、話の背後にある文化的・社会的な事柄の解説である。

4 結果

(1) パットさん

パットさんは1926年生まれである。面接調査は彼女の所属する教会でおこなった。

ロートンの活動能力指標によれば、10の項目のうち、「納税記録を集めたり、仕事や保険の書類を作成したりする」ことは「自分ではできない」であったが、残りの9項目は「問題なくできる」であった。パットさんは5人と友人関係を取り結んでいた。その1人は近隣地域に、残りの4人はメルボルン内に住んでいる。このほかに、養母の娘がメルボルン内に居住しているけれど、交流があまりなくて社会関係を取り結んでいるとはいえなかった。ロートンのPGCモラル・スケールの得点は16点であった。

〔日常生活〕午前7時半に起床し、暖房をつけて、朝食を作ります。朝食をベッドに持ってゆき、朝のニュースを見ながら、ベッドで朝食を取ります。朝

食はトーストと紅茶です。その後、シャワーを浴びて、着替えをし、外出します。1週間に2日オブ・ショップ(OP shop)で店員として働いています。(オブ・ショップというのは、キリスト教教会が経営している中古の衣類や日用品を販売する店である。) ボランティアの仕事です。それ以外の日もオブ・ショップに行き、そこで働いている人たちと長時間にわたって世間話をしています。家にずっといるのはあまり好きではなく、外出するのが好きです。オブ・ショップで話し込んで、結局、一日中そこにいることもあります。帰宅後に、庭いじりを少しします。鍋で8種類の野菜を蒸し、夕食を作ります。午後6時に、シェリーを飲み、テレビのニュースや好きな番組を見ながら、夕食を取ります。寝るまでの間も、シェリーを飲みます。10時半か11時に、床につきます。

私は人を訪問したり、人と会ったりするのが好きです。退役軍人会のソーシャル・クラブには多くの知り合いがいて、1週間に1度か2度そこに行きます。(退役軍人会のソーシャル・クラブには、ポーカー・マシンなど賭け事をする機械がおり、レストランやバーがある。一種の社交場であり、軍人だけでなく、一般の住民もそこへ行き、賭け事をしたり、食事をしたりする。) そのポーカー・マシンで遊んでできますが、1度の賭け金は20オーストラリア・ドルと決めています。そのバーにいる人たちはみな私を知っています。ついでに、そこにいる同年輩の男性たちをからかってきます。

私はかつて週に3回も映画に行きましたが、この頃は行きません。2人の友人は今でもよく映画に行きます。私はテレビでキャスとキム(Kath and Kim)のコメディを見るのが好きです。(キャスとキムというのは、メルボルンの郊外に住む母と娘が流行のファッションを追いかけるコメディである。) これを見ながら、よく笑います。

カトリック教会では、日曜礼拝の準備をしています。土曜日に礼拝用の台に布を敷き、グラスをその上に置きます。教会のオータム・フレンドシップ・グループ(Autumn Friendship Group)という老人会にも参加しています。このグループでは活動計画をあらかじめ立てて、活動しています。メンバーは50人ほどです。1週間に1度木曜日に活動をしています。この日には、一緒にビンゴをしたり、いろいろなところに行ったりします。競馬場にも行ったりしますが、メンバーの数人はケチで、あまり賭けません。

「何に幸福を感じるか」人と会って話をするとき、幸せだと感じます。この近所には、アジア人がたく

さん住んでいます。アジア人と会って話すのが好きですが、子供はいつも「ありがとう」と言うから、とくにアジア人の子供が好きです。最近、恐ろしいのは、若者がするスケート・ボードです。スケート・ボードと衝突して、転ぶのが怖いと思います。

心配なことといえば、高齢者の自宅の防犯があります。また、介護者が高齢者の自宅を訪問して世話をする訪問介護がよくないとしばしば言われていますが、これも心配です。政府の役人は高齢者用へのそうしたサービスを抜き打ちで検査をすべきです。

現在は健康ですが、自由に動けなくなったら、まず、ケア・ホーム(care home)を購入し、そこで自立して暮らします。自立して暮らせなくなったら、ホステル・ケア(hostel care)を頼みます。(ホステル・ケアでは、自分の部屋で暮らしながら、食事は施設の職員に作ってもらう。) 体の自由がきかなくなったら、フル・ナーシング・ケア(full nursing care)を頼み、施設の職員に生活全般にわたってさまざまな世話を受けます。そうしたリタイアメント・ビレッジ(retirement village)がこの辺りにはあまりありませんが、将来はそうした施設に入って暮らすつもりです。

高齢者はできるだけ自宅で暮らそうとします。私の姉メアリーは95歳で、老人性黄斑部変性のために目は見えませんが、自宅にまだ住んでいます。(後述するように、本人は孤児であった。メアリーは、パットさんを里子として育てた女性の娘である。) 市役所のホーム・ケア・パッケージを受けています。市役所が介護者を彼女の家へ週に1回派遣してくれ、介護者が家の掃除をしてくれます。買い物は市役所のコミュニティ・バスでショッピング・センターにまで連れて行ってもらい、そこで自分で買い物をします。台所のどこに料理道具があるか覚えていて、自宅では自分で料理します。冷凍食品を買っておいて、それをオーブンに入れて、自分で食事を作れるんです。市役所がやっているミールズ・オン・ウィールズ(meals on wheels)は頼んでいません。(ミールズ・オン・ウィールズというのは、ボランティアの人が弁当を高齢者の自宅に届けるサービスである。) メアリーはこのように自立して生活をしています。メアリーは敬虔なカトリック教徒ですが、教会の礼拝に行けません。そこで、司祭がメアリーの自宅に行き、コミュニオン(Communion)の儀式をしてあげます。(コミュニオンというのは、キリストの身体と血の象徴である、パンと葡萄酒を司祭からもらって食べる儀式である。) 近親者がメアリーを外に連れて行ってあげますが、彼女は私と違って社交的ではありません。

〔これまでの人生〕実母に捨てられ、捨て子でした。生まれて10カ月のときに、メルボルンに近い田園地帯のブロードメドウズ（Broadmeadows）にあった孤児院に連れてこられ、3歳になるまでそこですごしました。（ブロードメドウズは、現在ではメルボルン北部の郊外となっている。）3歳の時に、里親の女性に引き取られました。里親夫婦は2人の息子と2人の娘と一緒にアイルランドからオーストラリアに移民として船で渡ってきました。当時は大恐慌の時代でしたから、仕事に就くのがたいへんでした。そのため、父親と2人の息子は仕事を探しに、母親と2人の娘から分かれて、別のところに行ってしまうしました。（1929年に大恐慌が始まり、失業が深刻となった。多くの男たちは国内を放浪し、仕事を探した。そうした男たちはスワグマン（swagman）と呼ばれる。牧場などで一時的な仕事について、食事などをだしてもらった。メルボルンとアデレードとの間の海岸線に沿ってグレート・オーシャン・ロード（Great Ocean Road）があるが、この道路は失業者に仕事を与えるために建設された。その後、戦争が始まる気運が高まって、多くの男性は軍隊にぞくぞくと入隊したために、失業問題が緩和された。）だから、父親と2人の息子のことは知りません。2人の娘は母親のもとで育ちました。引き取られた当時、2人の娘はもう大人になっていました。長女メアリーは修道院で修道女となり、身寄りのない少女の世話をしていました。次女マーガレットは家政婦として他の家で働いていました。母親と一緒に暮らす話し相手が欲しかったから、孤児院に行ってお私を引き取ってくれました。こうして、私は里親の女性と一緒に暮らすことになりました。里親の家族は親切でしたが、貧乏でした。

しかし、この生活は長く続きませんでした。母親は1939年に精神病にかかってしまい、私を育てることができなくなってしまいました。そのとき、私は13歳でした。里親の長女のメアリーはメルボルンにある教会関係の身寄りのない少女を収容する養護施設に連絡をしてくれ、私はそこに入りました。その施設には私のような境遇の少女が200人いました。施設に入ったために、小学校6年生を終えただけで、義務教育を修了できませんでした。私が施設にいるときに、メアリーは修道女をやめて、結婚をしました。1954年までその施設にいました。施設では自分の好きなように暮らしていましたが、教会関係の養護施設に長い年月いたから、周りの人たちは、当時、私が修道女のような話し方や歩き方をするとっていました。

施設を出た後、メルボルンのトゥーラック

（Toorak, 高級住宅街）に住む家族のもとで、お手伝いとして働きました。給料は、1週間に5ポンド（pound）でした。1954年から1955年のことです。次に、アデレードに行き、ウェイトレスや農場でのフルーツ摘みなどいろいろな仕事に就きました。シドニーのさまざまなところでも働きました。お手伝いとしても勤めたのですが、耐えられなくてその仕事を1年でやめました。その後、シドニーで体育の先生になる教育を3年間受けました。私は高等教育を受けませんでしたが、先生となりました。そして、ニュー・サウス・ウェールズ州、ビクトリア州、南オーストラリア州の学校で8年にわたって体育を教えました。1967年におなかに腫瘍ができました。カトリック教会の紹介で南オーストラリア州にある病院に入院し、よい医者に診察をしてもらうことができました。3回の手術を受けました。手術の後6か月間は、働けませんでした。その間、私は修道院にやっかいになり、修道女に世話をしてもらいました。

回復してからは、数年の間、半日だけ学校の教師として再び働きました。その後、メルボルンに来て、仕事を探しました。少女の矯正施設で少女たちの世話をする社会福祉局の仕事にまず就きました。養護施設で暮らした経験がありましたから、この仕事に就くことができました。次に、両親に虐待されたり、世話をしてもらえない子供を収容する児童養護施設で、子供の世話をしました。1989年に、その施設は閉鎖されることになりました。人があまるので、退職勧奨に応じれば、有利な条件で退職ができることになりました。友人はそれに応じて退職するように助言してくれました。それで、退職をしました。

この仕事を通して、とても親しい友人（女性）が2人できました。（友人の1人は、市役所の福祉の仕事をしている職員である。）いつも気軽に行き来をしています。2001年に、私は心臓の弁の手術を受けました。私の姉たちはもう年なので、病院へ見舞いに来られませんでした。でも、その2人の友人はずっとベッドのそばに付き添っていてくれました。2人の友人は、10人の人たちと一緒にグループ・ハウスに住んでいます。友人はクリスマスや誕生日といった家族の集いに私を家に招いてくれます。その友人は、養子をむかえています。その子供たちは、私をバットおばさんと呼びます。2人の友人は、このように、私にとって家族のようなものです。

27歳で養護施設を出て、メルボルンに住んでいたころ、男友達と頻繁にダンスに行きました。当時、若い男女は知り合うとすぐにベッドを共にしましたが、私はそれがいやでした。男女は結婚するまで一緒に寝てはいけないと養護施設で教えられてきまし

たから。そのころ、アイルランド人の恋人ができました。私はアデレードに働きに行き、病気になってしまいました。その間に、メルボルンにいた恋人は本国に戻ってしまいました。私は失意の底に沈みました。こうしたこともあって、独身でずっとすごしてきました。

最近のことですが、イラクへのアメリカの侵攻に反対する行進に参加しました。私が侵攻反対の旗を振っているのを誰かが写真に撮りました。その写真が写真展の一等賞を取りました。

(2) マーガレットさん

マーガレットさんは1926年生まれである。庭のある、こぢんまりとした一戸建ての家に住んでいる。室内犬を飼いながら、一人暮らしである。庭は手入れがゆきとどいていた。調査は、彼女の自宅でおこなった。

ロートンの活動能力指標によれば、10項目すべてが「問題なくできる」であった。マーガレットさんは14人と社会関係を取り結んでいた。その内訳は、親族が6人で、友人が8人である。親族関係を取り結ぶ相手6人の続柄を見ると、娘2人、息子1人、娘の夫2人、孫娘1人である。1組の娘夫婦とその孫娘は近隣地域に、もう1組の娘夫婦はメルボルン内に住んでいる。友人のうち、1人は近隣地域に、4人は同じサバーブに、3人はメルボルン内に住んでいる。ロートンのPGCモラル・スケールの得点は13点であった。

〔日常生活〕月曜日の午前には、高齢者のための軽い体操に行っています。火曜日には、理学療法士のところに行っています。毎月の第2水曜日には、女友だちと映画に行き、その後、一緒に昼食を取ります。その人は学校のときの友人で、ブラックバーン(Blackburn)に住んでいます。(ブラックバーンはメルボルン東部の郊外である。マーガレットさんの家から近い場所にある。)水曜日には、カトリック教会のオータム・フレンドシップ・グループの活動に参加しています。その会の会計係をしています。その会では、ピンゴ、旅行、映画会などをします。金曜日には、病気や体の障害のために教会に行けない人に、コミュニケーションの儀式をして聖別されたパンと葡萄酒を届けるボランティアをしています。私は、老人ホームに入っている高齢者に届けています。毎週ではありません。当番にあたったとき、それをしています。土曜日には、ときどき庭の公開(open gardens)を友人と見に行きます。(庭の公開というのは、手入れの行き届いた庭を少額の入場料を取って一般に公開するものである。どの庭が公開される

かは、公共放送であるABCラジオで放送される。徴収された入場料は、チャリティのために使われる。)日曜日の午前には、教会に行きます。

子どもたちは誕生日やクリスマスには私の家に来ますが、復活祭(イースター, Easter)のときにはあまり来ません。(筆者の見聞によれば、クリスマスの日に、親もとから離れて暮らしている子どもが親もと行って、子どもたちが一堂に会する。だから、クリスマスは日本の正月に相当する行事であるといえる。)私は教会の復活祭の儀式や行事に参加しずし、それが好きですから。子どもたちにはそれぞれの家庭がありますから、子どもたちが週末に私の家に来ることはほとんどありません。子どもたちとそれほど頻繁に会っているわけではないんです。近所に長女のマリーンが住んでいます。マリーンは教師をしています。少し離れたところに、次女のスーザンとその夫が住んでいます。夫婦とも看護師で交替勤務がありますから、ときどき昼間寝ています。だから、私をあまり助けることはできません。私が若かったときは、専業主婦が一般的でした。女性は結婚したら、家にいて家事や育児をしたものです。でも、専業主婦は今では少なくなって、夫婦で働くようになりました。みんな忙しくなっていました。子どもたちは夫婦で働いていますから、気軽に親の元に立ち寄ることというわけにはいきません。週末だって、子どもたちは自分の家庭でやらなければならないことがたくさんあります。

孫たちは一定の年齢になりますと、自分たちの世界で生きてゆきます。だから、孫たちとはそんなに頻繁に会うことはありません。長女マリーンの子どものレベッカは母親と一緒に近所に住んでいます。レベッカは孫の中で最も年長である(27歳)ということでこの家によく来て、私や犬の世話をしてくれます。

自分のきょうだい²⁾とは誕生日のときに集まります。長男のケ빈は心臓の手術を受けました。きょうだいいずれにも孫がいますし、ケビンには曾孫までいます。だから、きょうだいから支援してもらったりはしていません。きょうだいはいずれもクリスマスを自宅ですごします。

このように近親者とそれほど頻繁につきあったり、そうした人たちに助けてもらったりはしていません。その代わりに、オータム・フレンドシップ・グループのメンバーと頻繁に会って、助け合っています。

〔何に幸福を感じるか〕現在の活動の中心は、読書です。小説やオーストラリア史の本を読みます。庭いじりはそれほど楽しくはありません。私は孤独

だと感じたことはありません。不安になったり、くよくよしたりすることはありません。若くして未亡人となりましたので、一人暮らしに慣れています。もし60歳代や70歳代で未亡人となったら、一人暮らしに適應するのがたいへんです。でも私はもう一人暮らしに慣れてしまっています。

〔これまでの人生〕私はメルボルンの郊外にあるディープディーン（Deepdene）で生まれました。（ディープディーンはメルボルンの中心から東へ10キロ・メートルほどいったところにある。）生まれたときは、そのあたりは既に宅地化していましたが、開発されていないところもありました。馬の放牧地が近くにありました。両親は家を所有していました。家には、果樹の木や小さな野菜畑があり、ニワトリを飼っていました。祖父母もディープディーンに住んでいました。学校は公立小学校ではなく、カトリックの学校に行きました。子どものころ、両親は厳格で、多くのことをするのを禁じていました。庇護された、安全な生活でしたが、自由が奪われた生活でした。結婚するまで、私は両親の家にいました。

第2次世界大戦後の1948年に、結婚をしました。結婚するには若すぎました。夫のジョンは空軍に勤めていました。結婚した後、今住んでいる地域に引っ越しました。私が若かったころは、女性は結婚したら専業主婦となることがあたりまえでした。私もずっと専業主婦でした。

夫は6人きょうだいの下から2番目でした。6歳のときに、両親は亡くなりました。父親は肺炎でした。夫は子どものとき姉の借りた家に住み、その後も、別の姉が借りた家に住むといった、とても経済的に不安定な暮らしをしていました。そのころ大恐慌があったわけですから、なおさらたいへんでした。そのため、結婚後、夫は家族に経済的に不自由な暮らしをさせまいとして、一生懸命働きました。夫のおかげで、私は勤めに出なくてもすみしました。運が良かったです。夫は家庭を大切にしていましたから、休日に外出することをあまりしませんでした。家族と一緒にキャンプに行き、自然の中で不便な生活をするよりも、家にいて、家のことを何かするのが好きでした。

1974年に、夫が50歳で心臓発作によって亡くなりました。そのとき、私は46歳でした。お金はそれほどありませんでしたが、夫の働きで家を買ってありましたから、未亡人となってからもあまり金銭的には苦労しませんでした。1974年に現在住んでいる家に引っ越しました。夫が死亡したとき、2人の娘は19歳と17歳、2人の息子は13歳と11歳でした。夫が死んだ後、自分の力で子どもたちを育てま

した。子どもたちは多感な年齢にありましたが、何の問題もなく育ってくれました。たいへんでしたが、私は運が良かったです。子どもたちはカトリックの学校に行かせました。当時、子どもたちをカトリックの学校へ一緒にやっていた親たちがオータム・フレンドシップ・グループにいます。そうした人たちとは、とても長い知り合いです。メンバーの多くは未亡人です。とてもいい人たちで、助けてくれます。再婚はしませんでした。その代わり、教会と深くかわって暮らしてきました。

（3）アイリーンさん

アイリーンさんは1922年生まれである。もともと1つであった敷地に、2つの住宅を建設してある。そのうちの1つの住宅に住んでいる。だから、住宅はこぢんまりとしている。きれいな住宅である。庭は手入れが行き届き、美しい花々が咲いていた。自宅のリビングルームに、子どもの結婚式の写真や家族写真が飾ってあるのが目を引いた。面接調査は、彼女の自宅でおこなった。

ロートンの活動能力指標によれば、10項目すべてを「問題なくできる」であった。アイリーンさんは18人と社会関係を取り結んでいた。その内訳は、親族が11人で、友人が7人である。親族関係を取り結ぶ相手11人の続柄を見ると、娘7人、息子2人、娘の夫2人である。娘の1人は近隣地域に、もう1人はメルボルン内に住んでいる。別の1人の娘は、メルボルンの南にある都市ジーロンにいる。友人の1人は近隣地域に、もう1人は同じサバークに住んでいる。ロートンのPGCモラル・スケールの得点は16点であった。

〔日常生活〕今週の月曜日には、募金活動を手伝いました。その後、庭いじりや買い物をしました。火曜日と水曜日には、とくに何もしませんでした。木曜日には、オータム・フレンドシップ・グループの活動に参加しました。金曜日には、家の掃除をしました。土曜日には、娘と買い物をし、レストランで食事を一緒にしました。日曜日には、教会の礼拝に行き、その後に友人と一緒に昼食を取りました。

〔何に幸福を感じるか〕9人の子どもに恵まれ、孫も26人います。曾孫も18人います。1人の子どもはまだ結婚していません。子どもや孫がたくさんいますから、子どもや孫たちが私の家に入れ替わり立ち替わり来てくれます。子どもや孫たちとのつきあいは頻繁ですし、どの子どもとも関係は親密です。ですから、孤独だと感じたことはありません。子どもたちとの交際が生きがいです。たくさん人間関係があって、幸せです。私は、型にはまった生き方

でなく、融通無碍(flexible)な生き方をしています。7人きょうだいでしたが、3人は既になくなりました。生きているきょうだいの中では、私が一番年長です。妹のアイリスは半身不随です。もう1人の妹のエレンは私と同じように未亡人です。弟のバーニーには7人の子どもがいます。お互い年をとって、会うのは年に数回です。きょうだいとの連絡に、電話は欠かせません。

庭いじりが好きで、草花を育てています。住宅の管理会社が庭師を雇っています。その庭師が庭の手入れ、住宅の共有部分や駐車場の掃除、草刈りをしてくれます。

[これまでの人生] 私はパーク(Bourke)で生まれました。(パークは、ニュー・サウス・ウェールズ州中部の北にある町である。ここは、同州の西部に広がる砂漠地帯に接した辺境の地である。パーク一帯は乾燥した地域で、牛を放牧するために利用されている。ダーリン川(Darling River)が近くに流れているが、干ばつのときには干あがってしまう。カウボーイがこの川に沿って牛を移動させる。)両親はアイルランドからの移民の子孫です。父親の祖父は政治犯で、囚人としてオーストラリアに送り込まれてきました。父親はパーク出身です。両親はパークの近くに牛や羊の放牧地を持っていました。土地はやせていましたから、生活は楽ではありませんでした。父親は栽培した野菜を牛車でグレンアルバン(Glenalbyn)まで持って行って売り、そこで食料や雑貨を買って帰りました。母親はそこに住んでいて、父親と知り合いました。そして、両親はパークで結婚しました。7人きょうだい、私の下に3人の弟がいました。

1935年、私が13歳であったときに、大きな干ばつがありました。そこで、一家でパークからフィンリ(Finley)に移り住みました。父親がその灌漑施設を建設する仕事に就くためです。(フィンリは、ニュー・サウス・ウェールズ州中部の南にある町である。ビクトリア州との州境に近く、マレー川(Murray River)が近くを流れている。土地は肥沃であるが、ひどい干ばつがときどき起こっていた。1929年から大恐慌が始まった。失業者に雇用機会を与えるために、灌漑施設の建設が1935年から始められた。この灌漑施設のおかげで、フィンリはオーストラリアで有数の農業地帯となった。)引っ越しで、生活は大きく変わりました。フィンリに5年間住んだ後、1940年にメルボルンに移りました。メルボルンに住んでいるときに、第2次世界大戦が始まりました。2人の兄は出征しましたが、無事に帰ってきました。

私がメルボルンに住んでいたとき、ジョンと1943年に結婚しました。夫はカンガルー島(Kangaroo Island)出身で、フィンリで知り合いました。(カンガルー島は、南オーストラリア州のアデレードの沖にある。)夫はもともと農業をしていました。私たちは新婚生活をメルボルンで始めました。夫は戦争には行きませんでした。メルボルンでは、夫との間に5人の子どもができました。1952年に、子育てによいと思って、コブデン(Cobden)に一家で移り住みました。(コブデンは、メルボルンの210キロ・メートル南西にあるビクトリア州の田舎町である。肥沃な酪農地域である。)そこで農地を買って、農業を始めました。8年間がんばってみましたが、うまくゆきませんでした。そこで、1955年にカンパダウン(Camperdown)に引っ越しました。(カンパダウンは、コブデンの近くの町である。カンパダウンには、アイルランド系のカトリック教徒が多く住んでいる。)夫はそこで路上駐車料金のメーターの検査・集金員をしていました。1973年に交通事故に遭い、この事故がもとで、仕事をやめました。60歳になる少し前のことです。首と腕に痛みが残ったので、ジーロン(Geelong)にある病院に頻繁に通院しなければならなくなりました。(ジーロンはメルボルンの南西約30キロメートルにある都市である。人口は約15万人であり、ビクトリア州でメルボルンに次いで人口が多い。)通院しやすいように、1978年にジーロンに引っ越しました。でも、(子どもたちはメルボルンなど別の場所にすんでいたの、)ジーロンに住んでいるのでは、頻繁に子どもたちと会うことができません。そこで、1997年に今住んでいるメルボルンの家へ引っ越してきました。メルボルンを選んだのは、娘たちがそこに住んでいるからです。そのころメルボルンに住んでいた娘の1人は、私たちと頻繁に会えるように、私たちの近くに住みたいと考えていました。私たちと同じことを考えていたんです。私たちは子どもたちにメルボルンへ引っ越すことを前もって知らせておきませんでした。そのために、その娘は私たちがメルボルンに引っ越してきたのと同じ月にメルボルンの自宅を売って、ジーロンに引っ越して行っていました。引っ越しが行き違いになってしまったのです。

この家に引っ越してから数カ月後に、夫は亡くなりました。この家で日曜日に昼食を食べていたとき、夫は突然倒れてしまいました。私が75歳のときでした。それからは、ずっと今のような一人暮らしをしています。

5 考察

第1に、社会関係に代替性があることだ。娘が近隣地域やメルボルンに住んでいたこともあり、アイリーンさんは子どもや孫たちと頻繁に交際をしていた。さらに、彼女はどの子どもとの関係も親密だと言っていた。これに対し、パットさんにはそもそも子どもがいなかったし、マーガレットさんは事情があつて子どもたちと頻繁に交際することができなかった。そこで、パットさんやマーガレットさんは教会のオータム・フレンドシップ・グループなどの活動を通して友人を作り、友人と頻繁に交際をしていた。とすると、パットさんとマーガレットさんは、子どもたちとの交際を友人との交際によって代替していたといえる。

第2に、高齢女性の主観的幸福感に関してである。ラーソン (Larson 1978) はアメリカの高齢者の幸福感に関するこれまでの研究を検討し、健康と社会関係が幸福感に影響を及ぼす重要な要因であることを指摘した。

では、本稿で紹介した3人の高齢女性はどうかを検証したい。まず、パットさんはロートンの活動能力指標の10項目中9項目を自分でできたが、マーガレットさんとアイリーンさんはすべての項目を自分でできた。だから、3人の高齢女性はいずれもが高い活動能力を有し、健康であるといえる。次に、3人の高齢女性は交際をする相手が相違していた。パットさんとマーガレットさんが主に交際をしていたのは友人であつたのに対し、アイリーンさんが主に交際をしていたのは自分の子どもたちであつた。こうした違いがあるものの、3人の高齢女性は人々と頻繁に交際をしていた。それから、PGCモラル・スケールの得点は、パットさんとアイリーンさんが16点で、マーガレットさんが13点であつた。筆者が岡山県高梁市の高齢女性を対象におこなった調査(野邊 1999b)ではその得点の平均は11.29であつたから、3人の高齢女性の得点は比較的高く、主観的幸福感が高いといえる。以上のことを勘案すると、3人の高齢女性の主観的幸福感が高かつたのは、健康で、豊富な社会関係を保持していたからと考えられる。

第3に、大恐慌がオーストラリア人の家族の生活に影響を及ぼしていたことだ。まず、パットさんの里親となつた女性の夫と息子たちは、仕事を求めて家族を離れて行ってしまった。次に、マーガレットさんは、大恐慌によって自分の生活がどのように変わったかを語ってはいなかった。しかし、彼女の夫は大恐慌の時代に両親が亡くなったために、つらい幼年時代をおくつた。そこで、結婚後、夫は家庭を

大切にした。それから、大恐慌の失業者対策のために実施された灌漑施設建設の仕事に就くために、アイリーンさんの家族はフィンリに移り住んだ。これらの事例から、大恐慌がオーストラリア人の家族の生活に大なり小なり影響を及ぼしていたことを読み取ることができる。

これらは、3人の事例にすぎないかもしれない。しかし、これらの事例から、オーストラリアの高齢者の多くは若かりしころ大恐慌という荒波をかぶり、人生がそれによって翻弄されたと考えられる。

第4に、第二次世界大戦直後、オーストラリアでは専業主婦が一般的であつたことだ。そのころ結婚したマーガレットさんとアイリーンさんは、これまでずっと専業主婦であつた。また、マーガレットさん自身も、「私が若かつたころは、女性は結婚したら専業主婦になることがあたりまえでした」と語っていた。これらのことから、夫は一家の稼ぎ手で、妻は家庭内で家事や育児を担当するといった夫婦間の役割分担がその当時強かつたことをうかがえる。

これに関連して、ギルディング(Gilding 1997:202)は、オーストラリアにおける結婚の変化について次のように言っている。第2次世界大戦直後には、結婚をすることはしごく当然のことであつた。また、夫の権威がオーストラリアの家庭内で受け入れられていた。そして、夫が一家の稼ぎ手として働き、妻が専業主婦として家事や育児をおこなうという役割分担は当然のことと考えられていた。1960年代から、結婚することが当たり前のことではなくなつていった。1970年代と1980年代に、単身、ゲイカップル、事実婚といったような暮らし方が広まつた。女性の就業率がだんだん高まるにつれて、家庭内における夫の権威に異議が唱えられるようになり、夫婦の間での伝統的な役割分担がゆらいできた。1990年代までに、圧倒的に多くの人々が、義務感などからではなく、相手と協力し合いながら暮らすために結婚をするようになった。

6 結論

メルボルンに住む3人の高齢女性に日常生活やライフ・ヒストリーの聞き取り調査をおこなつた。本稿では、聞き取り調査の結果を紹介し、それに考察を加えた。その結論は、次の4点にまとめることができる。

①子ども(夫婦)と頻繁に交際できない高齢女性は、代わりに、友人と頻繁に交際をしていた。そこで、社会関係には代替性があるといえる。

②3人の高齢女性が高い主観的幸福感を持っていた。これは、高齢女性が健康で、豊富な社会関係を

保持していたからと考えられる。

③大恐慌は、オーストラリア人の家族の生活に大なり小なり影響を及ぼしていた。

④第二次世界大戦直後、オーストラリアでは専業主婦が一般的であった。

(注)

1) メルボルンは狭義では都心が含まれる地方自治体としてのメルボルン市をさすが、広義ではメルボルン大都市圏 (the Melbourne metropolitan area) のことである。本稿では、後者の意味で用いることにする。

2) 「きょうだい」とひらがなで表記するときは、兄弟姉妹 (sibling) を本稿では指すことにする。

(引用文献)

Gilding, Michael. 1997. *Australian Families: A Comparative Perspective*. South Melbourne: Addison Wesley Longman Australia.

Larson, R. 1978. "Thirty Years of Research on the Subjective Well-being of Older Americans." *Journal of Gerontology* 33:109-125.

Lawton, M. Powell. 1972. "Assessing the

Competence of Older People." Pp.122-143 in *Research Planning and Action for the Elderly: The Power and Potential of Social Science*, edited by D. P. Kent *et al.* New York: Behavioral Publications.

Lawton, M. Powell. 1975. "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision." *Journal of Gerontology* 30: 85-89.

野邊政雄. 1999a. 「メルボルンにおけるインドネシア移民」『岡山大学教育学部研究集録』 No.111: 75-85.

野邊政雄. 1999b. 「『高梁市高齢女性のパーソナル・ネットワークと主観的幸福感調査』の基礎分析」『岡山大学教育学部研究集録』 No.112: 57-78.

野邊政雄. 2000. 「『メルボルンに居住する女性のパーソナル・ネットワーク調査』の基礎分析」『岡山大学教育学部研究集録』 No.115: 29-55.

(本稿は、平成16年度～平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)「オーストラリアの大都市に住む高齢者の社会的支援ネットワークの研究」)(課題番号16402027)の研究成果の一部である。)